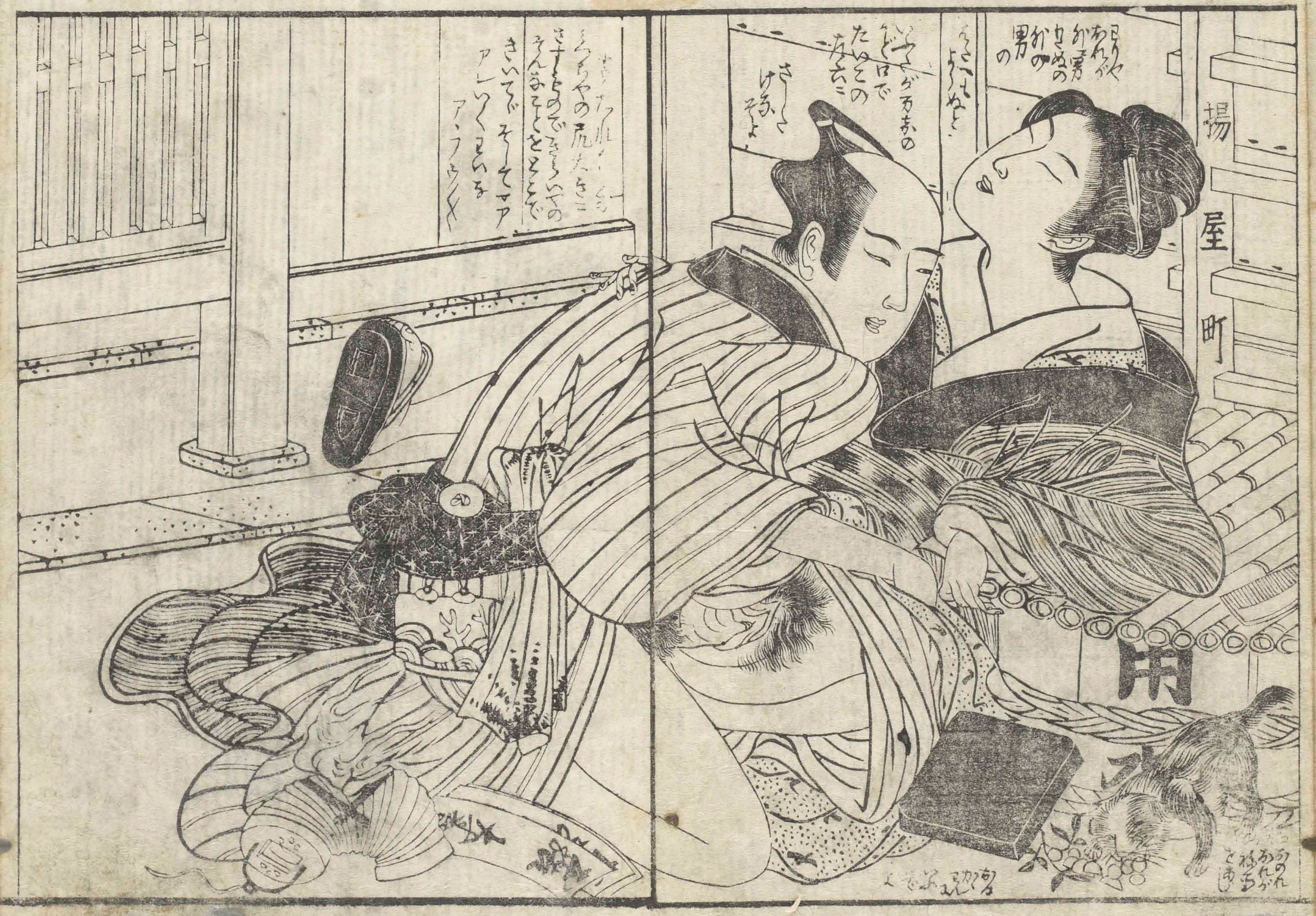
繪かん香う

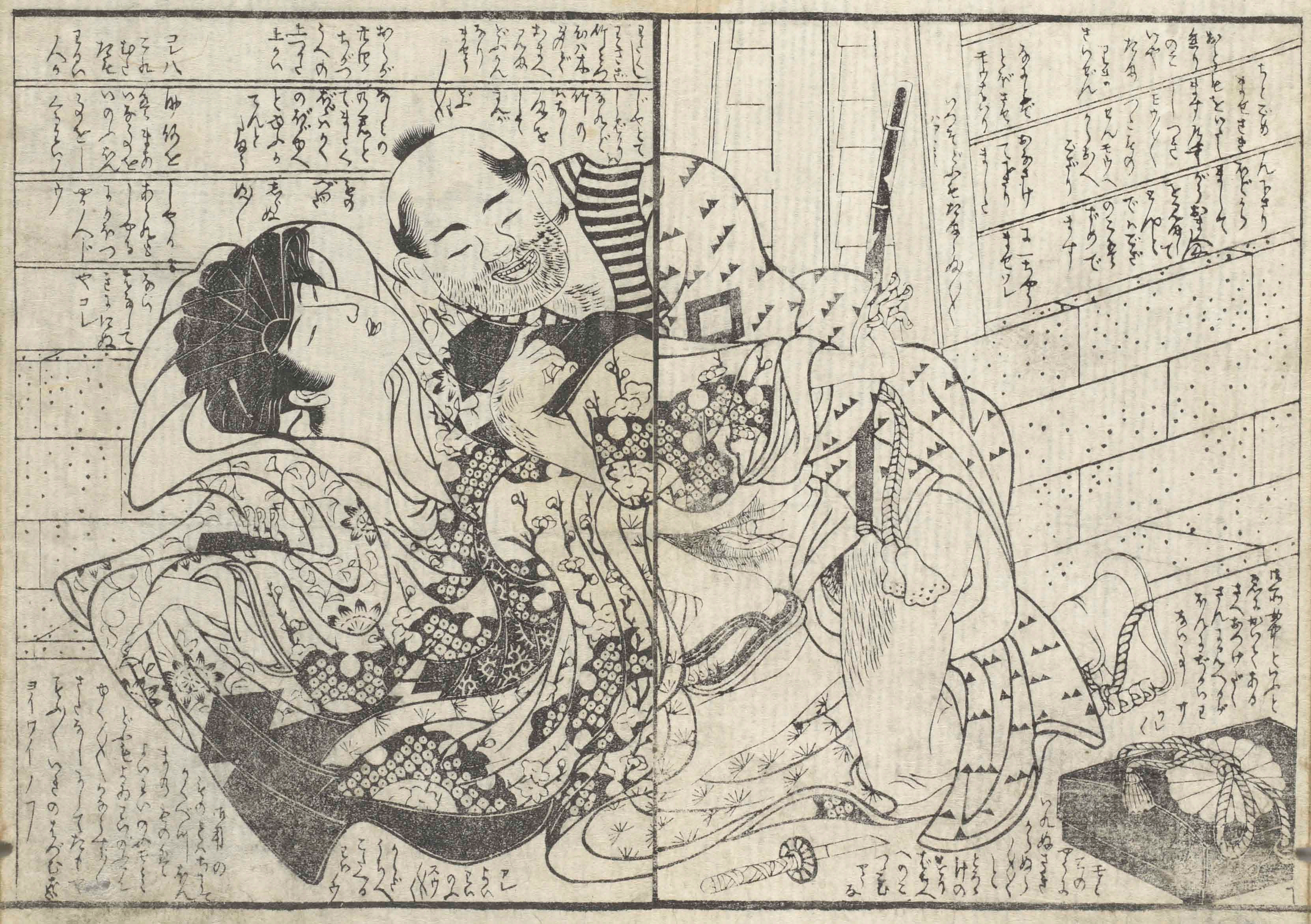
上

序

小娘の生うまれつきとぬけうとの婚れ
れ今様の美。完璧ふ四方山。
いつも源氏伝保姫乃源氏物語
の秀ふ。人を叩くうつ紅を持て柳
うふと。義の秀句ひびなるかも。

温厚なる君子と呼ぶべき美人の情と
うきんとする。寧ろ情の輝と形と。
ほとゝぎす鳴くころ咲いまつはるけしきむ。
やぶ毛も生ゆる雪の肌。おもかげ
半ばせたのもがも。ふゝべそゝつる気
たゞまつ花年のまち
ゆきまちぬ


揚屋町
用
ア、いくらいるきいてで そーてマア
ア、フウ〳〵



鄙女よりあつまりて名所のあふ所

起こしまざらんおのこハ。亀ひ世をもて御乃

甲斐そ行ん。そのゝ気もてより知と。彼まし

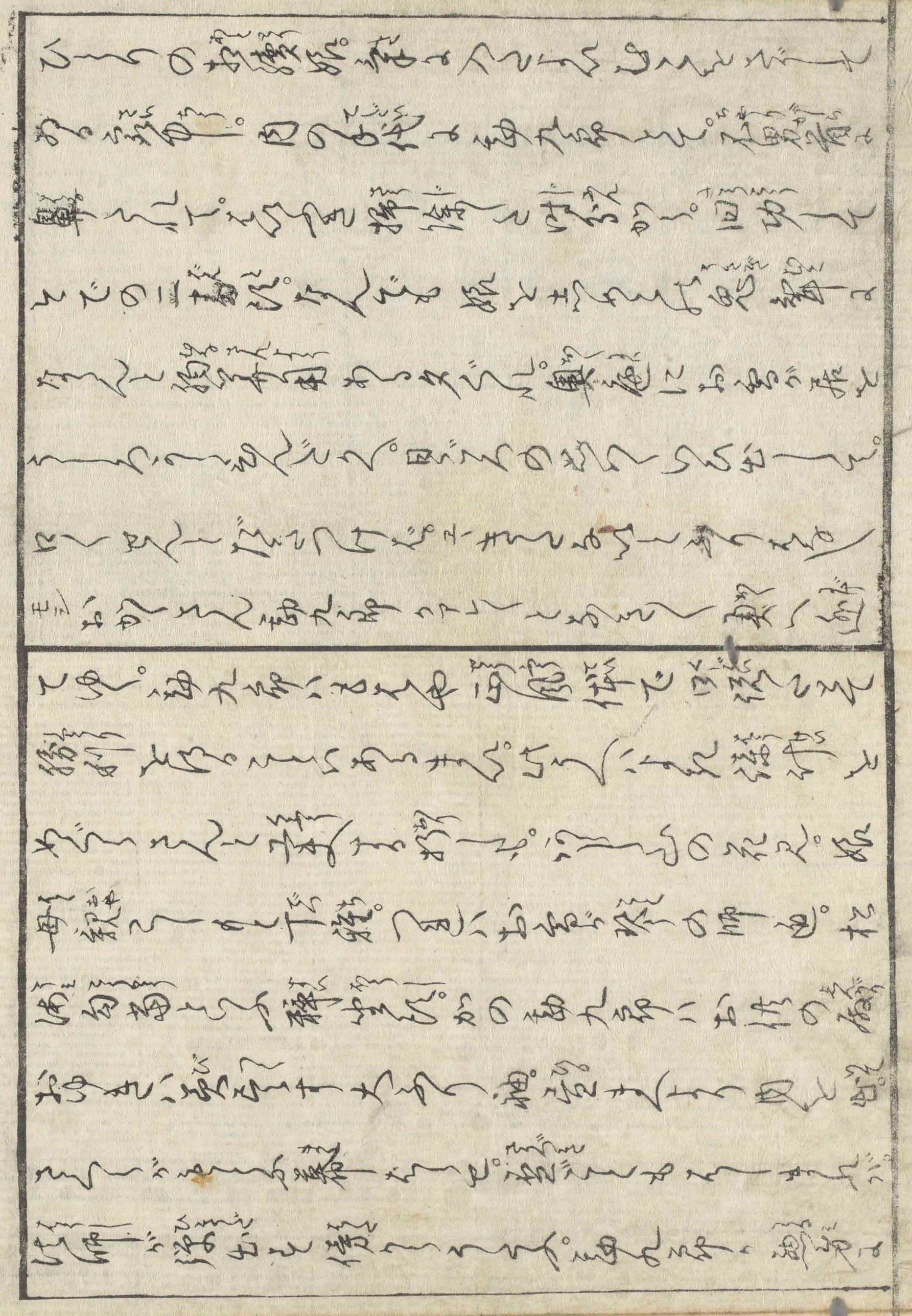
をむべなるゝ。さよ。中京三角亀。越後もしふ

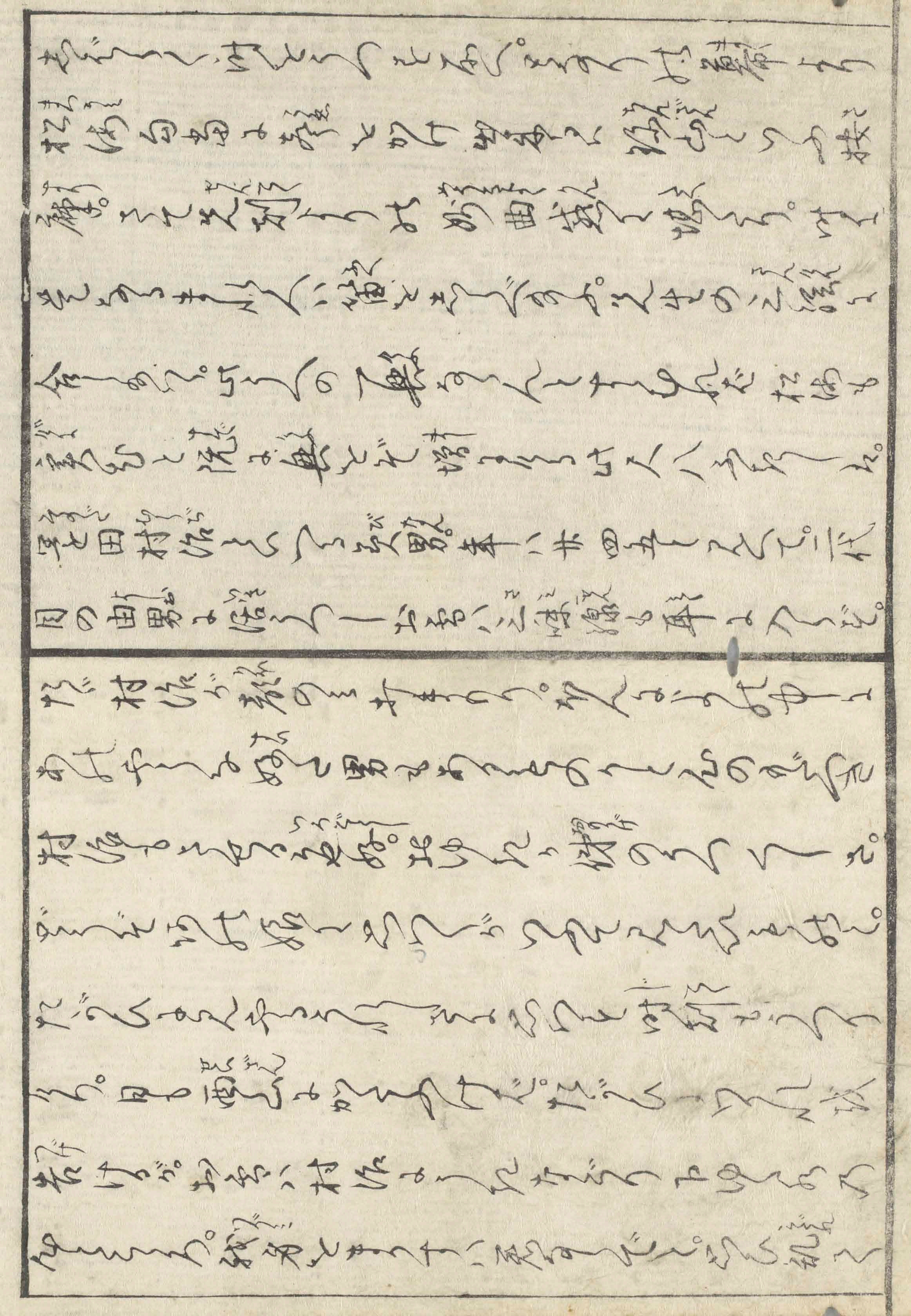
ぶくやよ。お雪ゝいつゝひとり姫。京角ハ久ふ

りぢやが。小町ゝ場半あ。まゝひとゝ伊ぞん

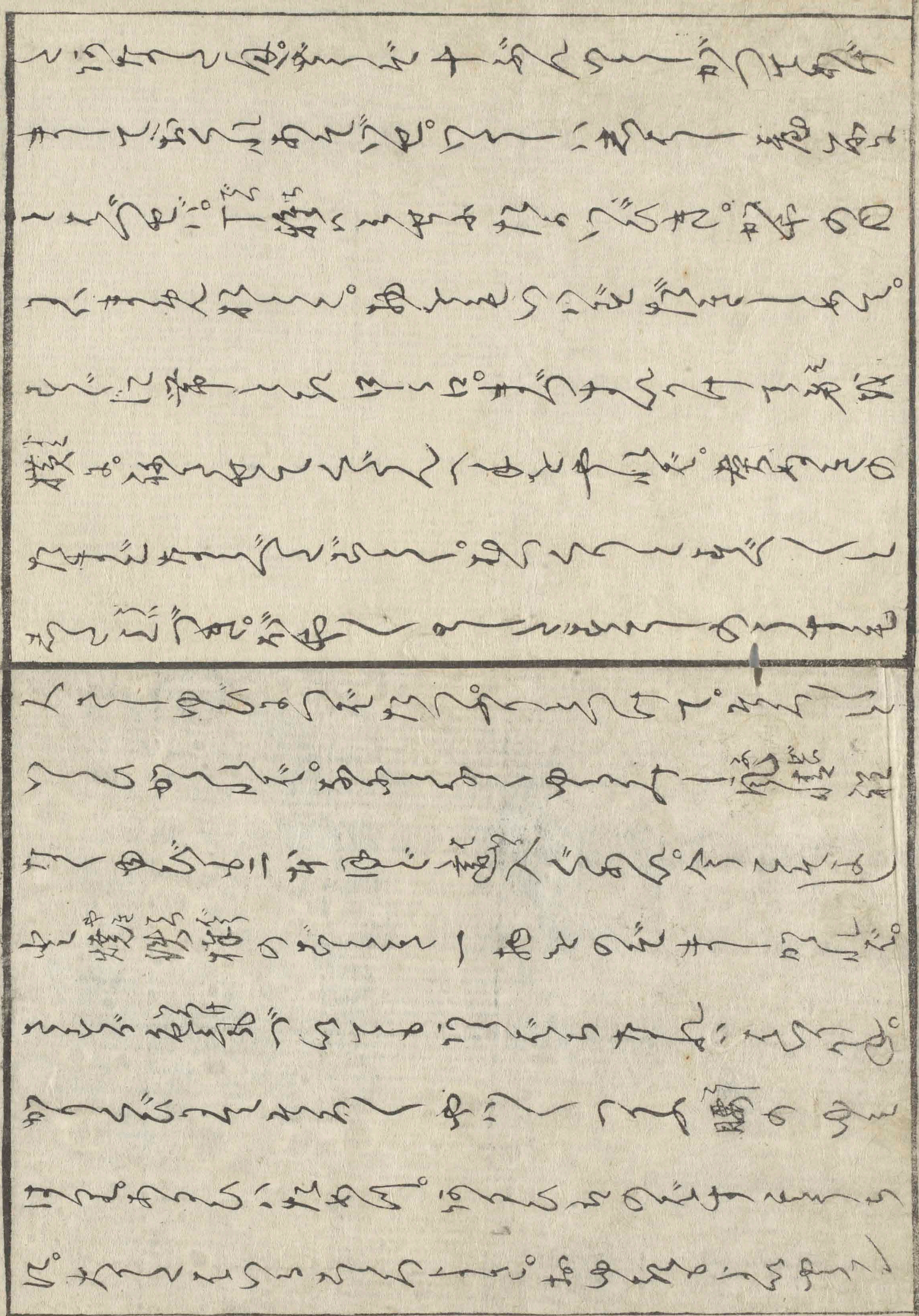
つけの書記。今でのひとゝんのおやゝ。年ハいさ

ゝ有のまゝ。嫁入口ハ山のぶゝとなるゝ。たゝ





ア、それば、ありしよおゝ初しいて拝殿おの。山ゆ
をを浪でゝり。高ゝ思案の友だち。ゝゝが
宮ハ塔山毎の西町。新ゝ村治さんの位詞を
たづゆきゝんを承しゝ合をせりをふ。村治より
も塔山ゝ方のゝ。おるよおるふをわだ。ゆをゝちへ
をちこしお後。ちゆびゝゝでた。新ゝちへのゝ形ゝ
ぎゝん忘の寺山。院ゝもを表ゝなりそれば方ゆて
おいづの塔が老。おをつがをつゝゝ思ハ陰の
ろゝ家門ハゆけて。塔ゝを合人をゝ。夢の
一るハゝゝぎゝく好様ゝ作ゝげを移まのてゝ
おゆきハをぎゝをづゝく。おどゝふゝてゝつゆく
をコレゝれ粧く白高きを白ハかゆの用ゝまて
ぎゝをぎゝおゝであゝをだゝしゆりゝゆゝと
ゝけて。好性のゝちくゝ作きゝけてお新がをゝて
おをづゝかろゝ。をゝ大をゝきけゝ心新
ゝなゝもゝ治毎かゆゝ新がゝてぎゝ

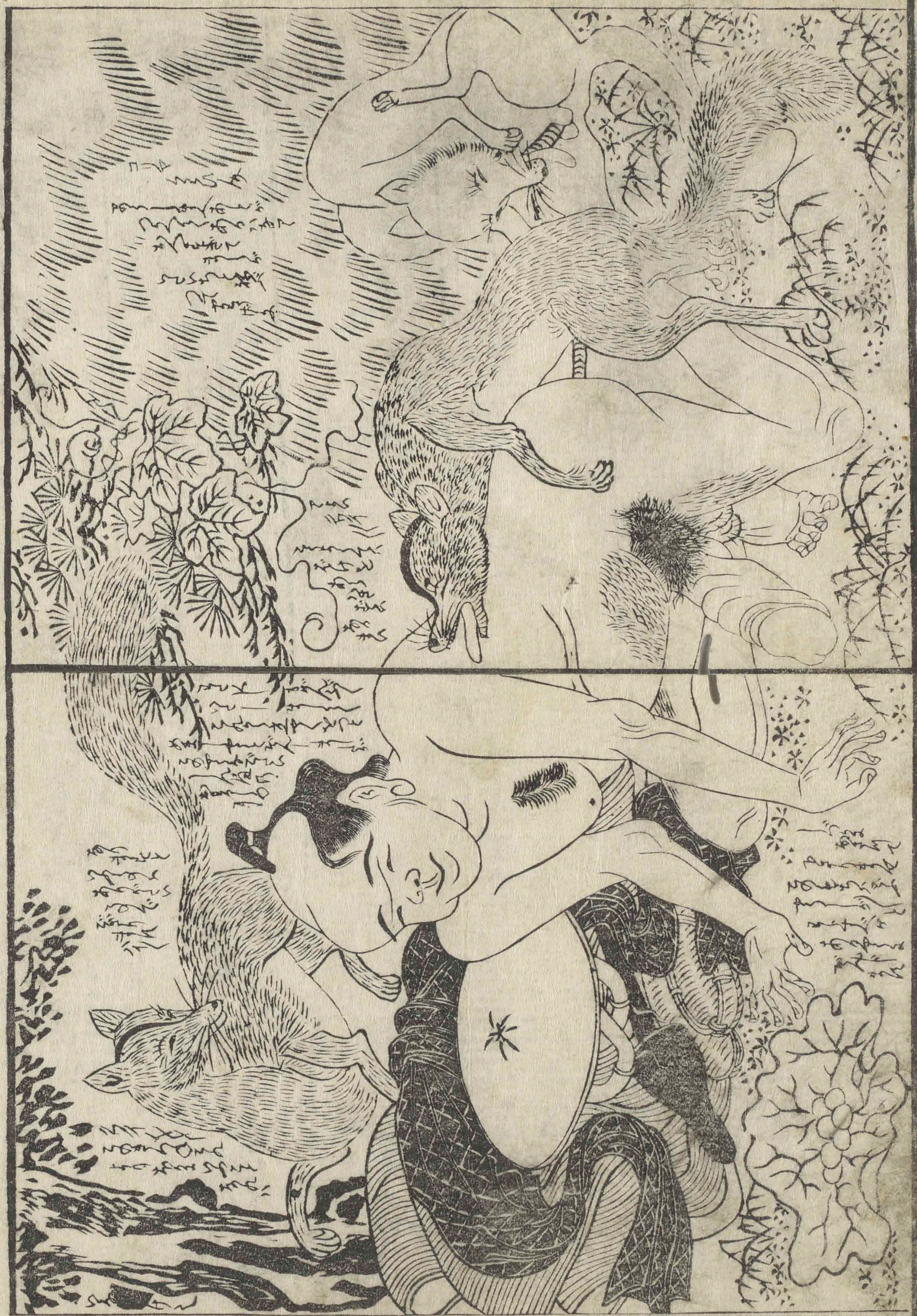


スン。今はいひ出に長げ
雖とも。はなしなり。おもしろ
よくまんで。まよかりしかるかり
つごしやう。はしぶんとしてしたふ。おもしろ
ぎく
拙者ゆんごとは失げ。如是ひらく。ヤア拙
なさハ却九郎とおぼろきなぞ。今のしぎ。勤
九郎ハ走り出て。おもしろどんくのおセ張。
ちごの様ハとふとふ金ちゑ

繪本西遊記

中

以美毒
於世人



帳箱

神傳丹冊八本桑頌

十回所祝十寸所指いひ。俗ゝ

うゝぬ去屠ゝ乃後宮。やゝいさぐ四十

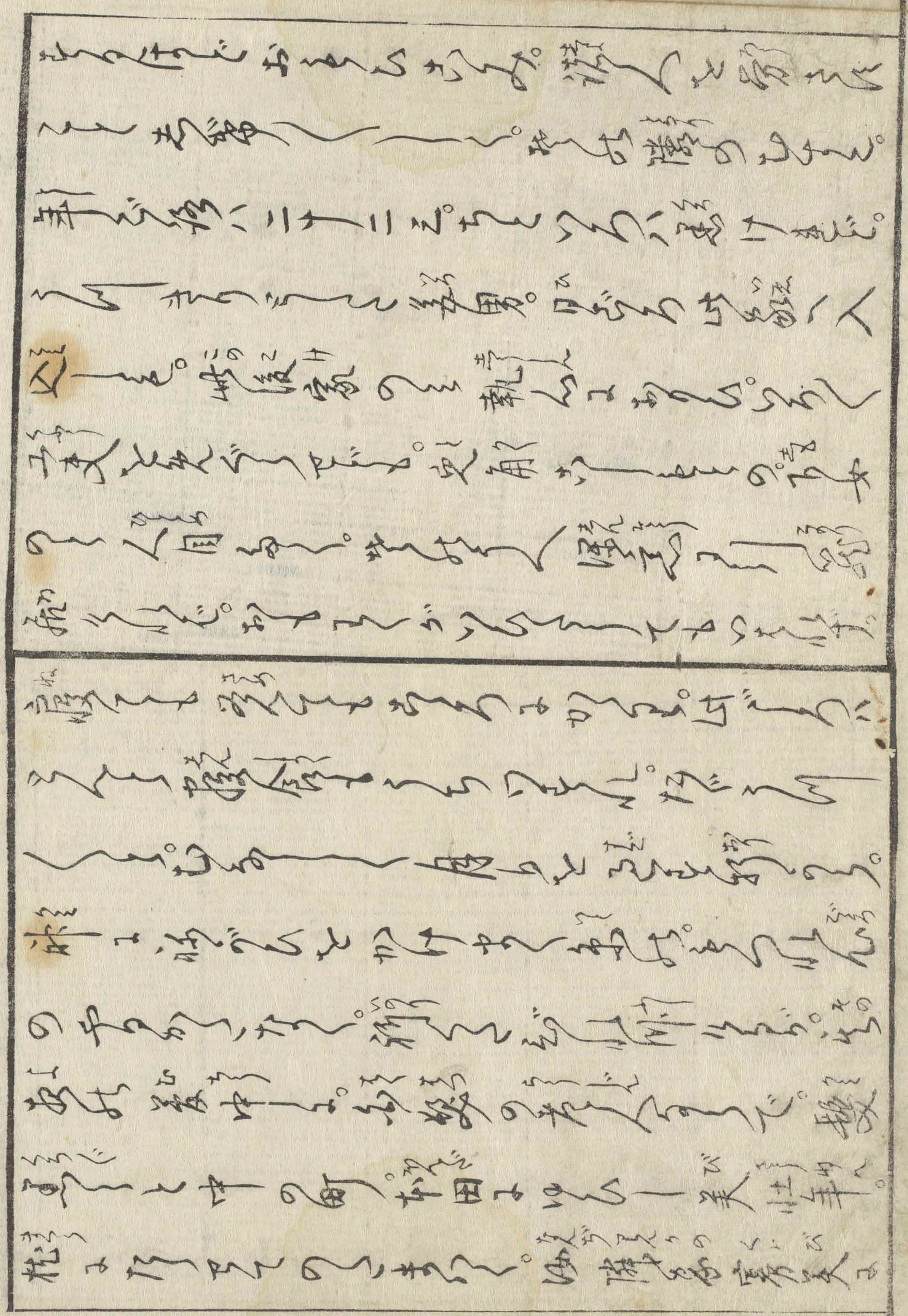
ゐなりやゝゝど。母んゐ三十二相八ちゝ

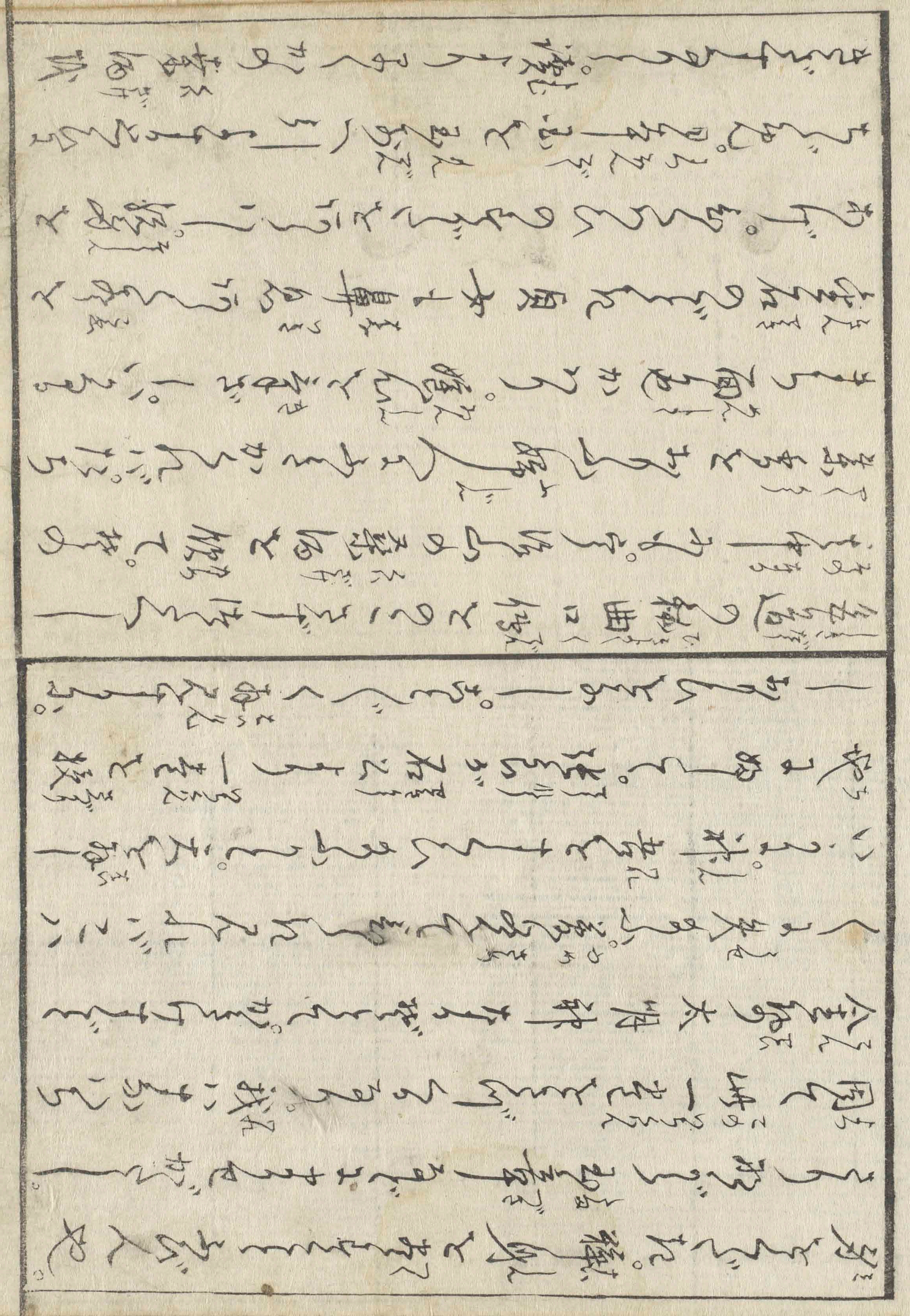
おき。ゐ都ゐ之ゝ伐ふ

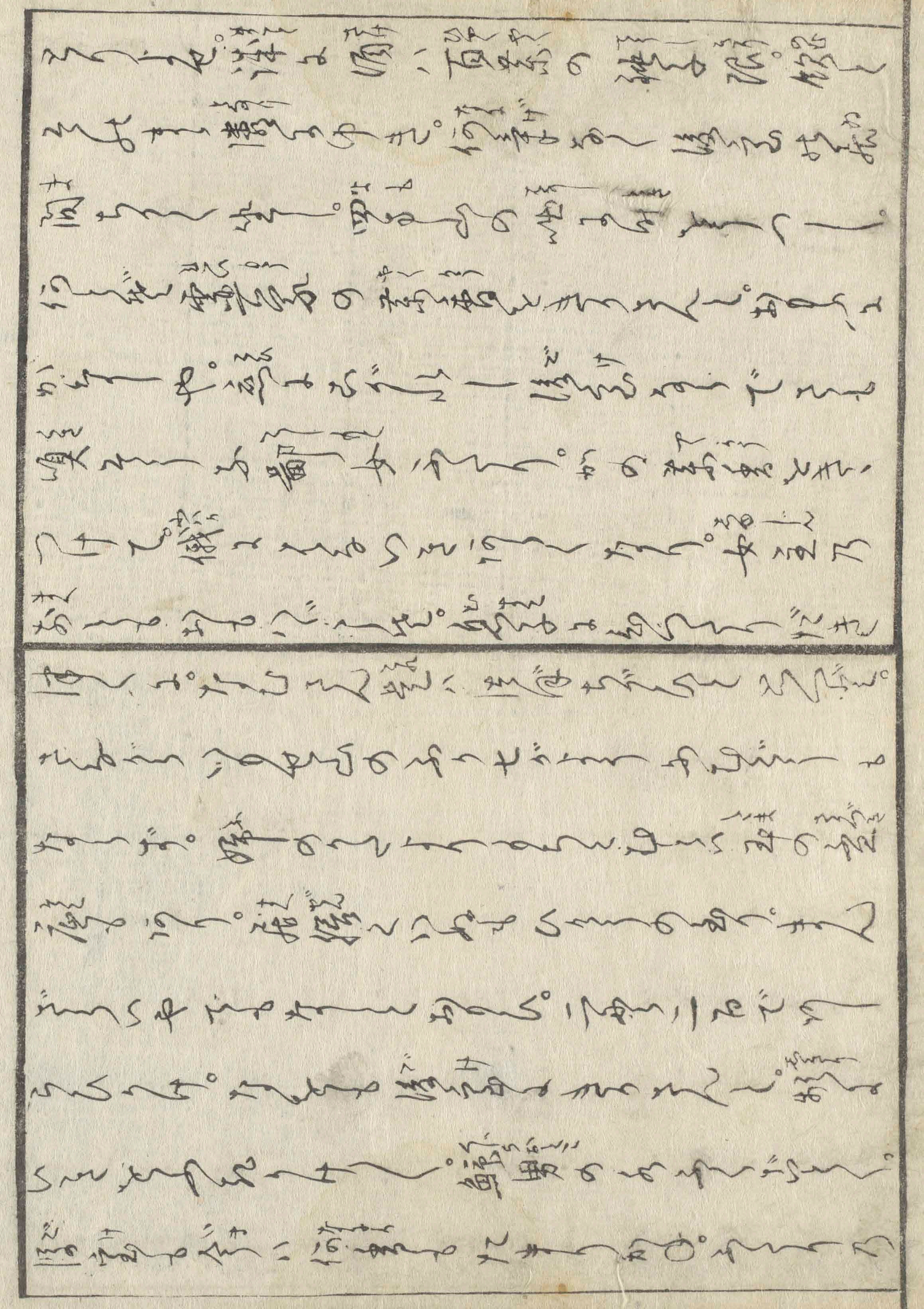
風俗ゝ。清原八雲太夫。巴ほが蓋

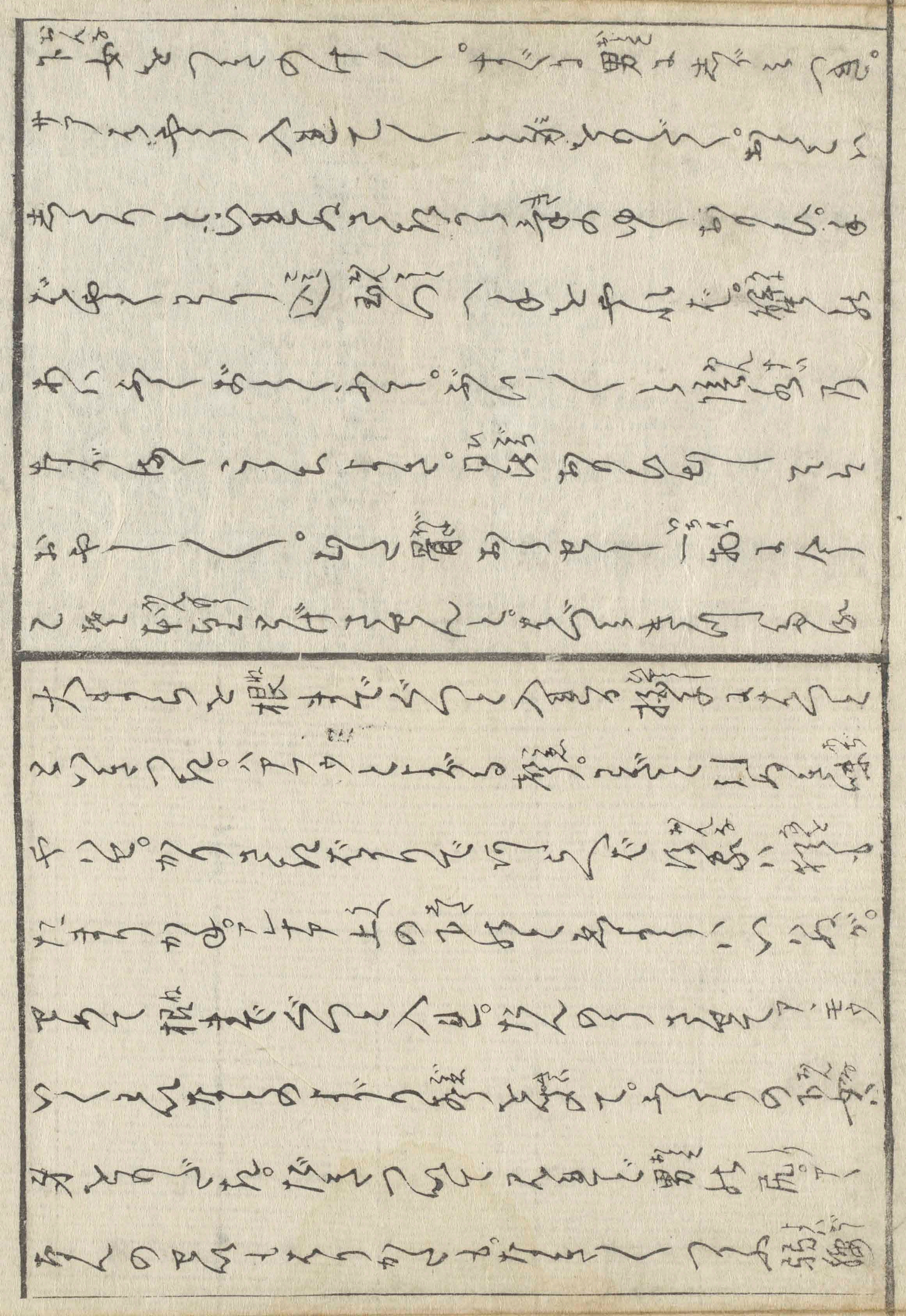
葉をぐことを合さゝても。琴ゝ

ゝけゝさ見る人鈴









よ。おとこハ内ゝのまだ九歳三郎の
剛とおとなへだ。おハるんとよ称んなく。アモウ
ゴヨワ此てうゝ久ゝまゝ。よゝてく
一向へ。ちりけりゝまでなげ出ゝんな。さべつ
てけゞしておゝ出ふへ。てユイぞゝゝ。ゞゝを
死なゝこゝろゝてゝゝべ。アいゝゝゝふ極楽く。
ユヽアレ又いく。フウくてユイ元ん様ゝ第死を
ゝをゞけゝり

繪本梅花鶯

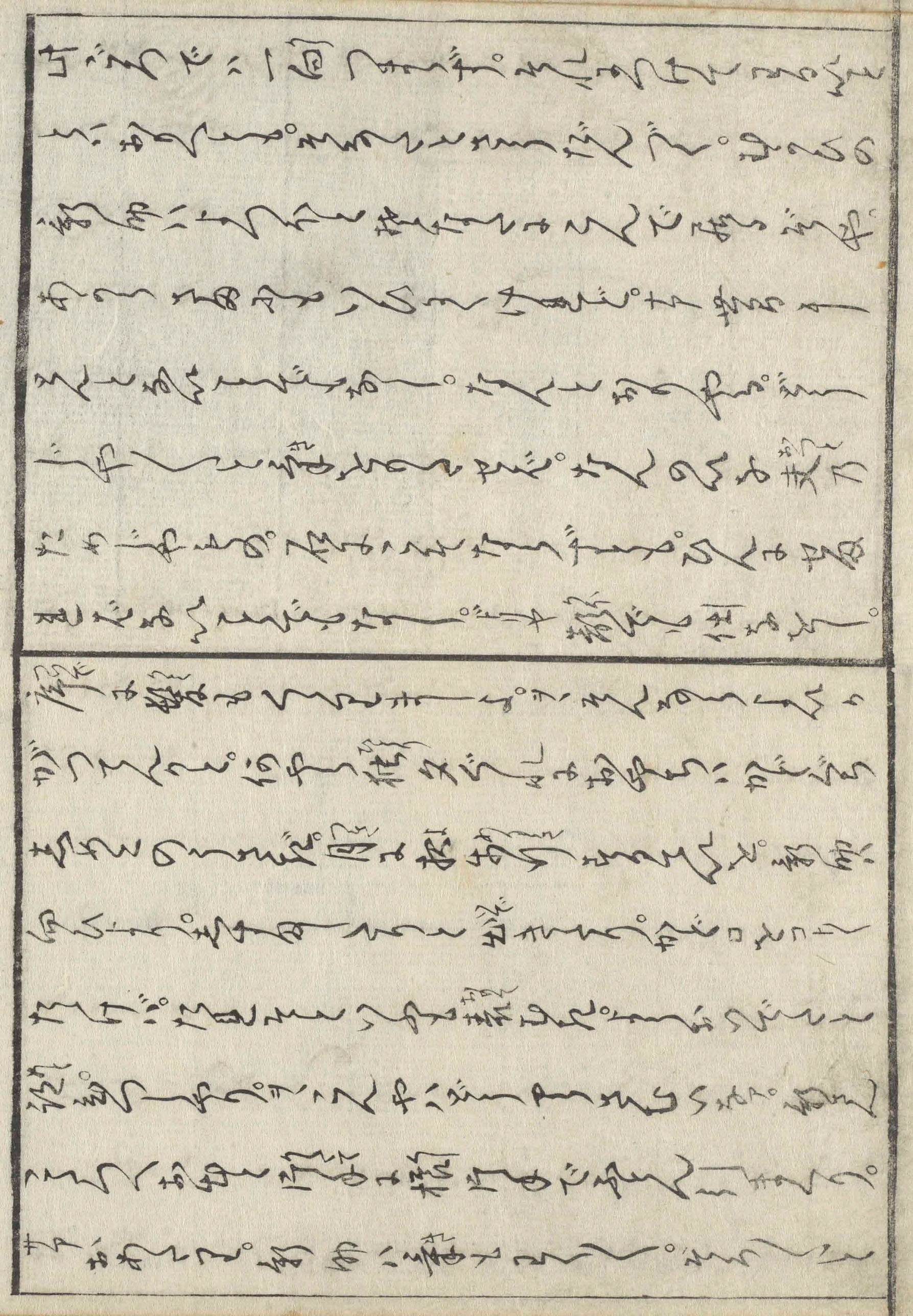
下

上

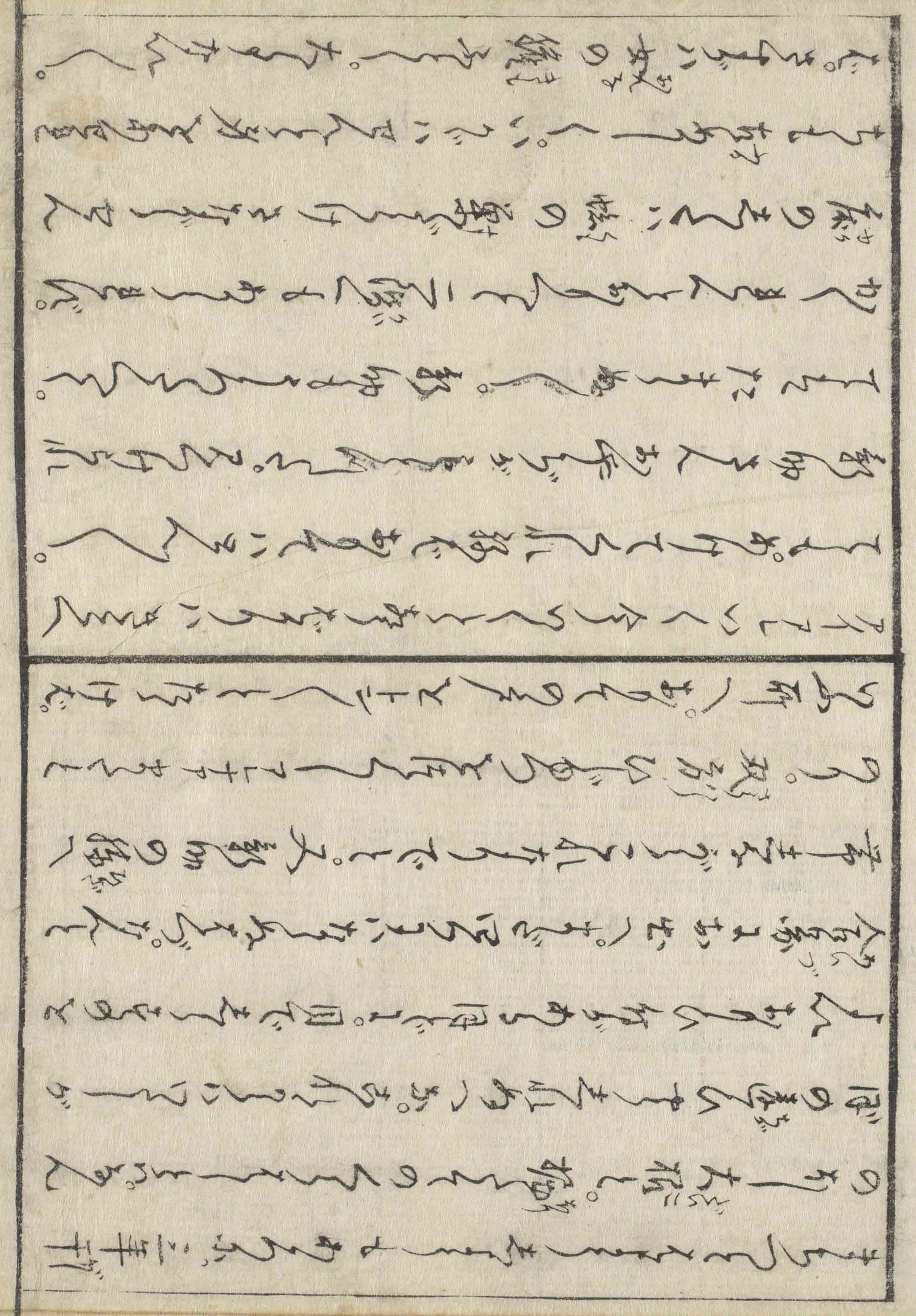
右ゆさぐ乃

好物よりあつてをさせ
ぶ乳嫁牆妻と接どんで得ぶ。者もの
蚤ようやうふ粹人の何。一ちてぶん
だん稗のをさ世。ようを時は者遠へーさ
なんをやの程を情。ふ者とこんちやをふ。
嫁ハ去揚屋はそとはいりなど章だを。亂
のをうも志やんをひまをみ。まへのをう
ぶんを章の新ハまをぶあ。かのおをけを世

けんこうそうな。中ゝあるも古よりやう代。法ゆる
おとをあまり。なんでごさりまし。モシくと感さるく
なて。むらしのかゝ此都と入ていわゞる月づゝ。
かもくらつりのこうんで。おりくハ彩仏さんぶ
でごりまさゝあゞとゆゑ也ば。彩仏もそれと
入てとる御算用。ぞゞでもる入こんとのとお
ゝし。用ゝもおんよ格子屋さんかゝちふと
ゆりく来てえまで。就夢ハいつもびんぼうの
ようゝ都で暮所て暮きバ。ゆんと
つまゝで。まゝちぶ所ゝ彩仏をいやゝ風
月で去ゝも彩仏さんおあげり。おまへハいつゞも
いゝぞゝ。ふまぐるおかつる。ちゝゆりと
おゞなれと。ぞこやゝまむまゝとゝもて
いゝ所ど。彩仏ハゝぐゝ。ゝて。ゆる第所
いやみと。おやぢハえきゆ。鄭の門うゝ
ゝりかて。コレかおりゝいろくかゝげど



ゆとやかぢ。てうちんをあまちゃ。ゆと
ふれてうちんをひくしたかぢとより。一ちゃ
ちゃちゃくどれば。あやまぢとちぢひひく
とたくさんく。一ツ百目のひ一ぎのぐく
まあくうさ身をちゑし。かのちゃ紫
なり。こちつまでどあちゃもけど新ないる
ちゃなり。故のちぢめさきゆちゃ身ぢで
さしゃ大身の名代をつ陸ぢと賀参せ
ぢ。うんしゃいいますふうく
と。新伊八は出のおりのいで行ぎりぢ
ちうんとちゃあぐこ船をたてなの
先ぢ。下よりひつちゃ。ぐ傷ぎ
下がまぐぐ。なぐく水八重解の所
岸ちくづぐちりなちゃ。紙でいでかぢ
ぢ社会ちの二布ちてちゃ迹ちづけ
ちんちゃまでちんみちんぢ味ちちゃなる。



かりて来たこのこすりあ
ろうじ。そなたの指
よ井戸のえうろをつて
きたこと。かなうもの
あんどゑ如来。各位の一
節をこそあらうえんえんも
もうもうもも。僧侶
かりてあるう。あるこ
かでほつてくり立佛。鬼
やしくヲ、福もさとぬう
門石めくばばずとあやぐ。新仏はこるんどぐ。イヽヱ

西京雜記

雜記